## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	W・ジマーマン著『最近のソビエトの国際関係論』
Sub Title	William Zimmerman, "Soviet perspectives on International relations, 1956-1967"
Author	中沢, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1969
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.12 (1969. 12) ,p.149- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00224504-19691215-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある。

国に紹介されることを期待するものである。ことについては異論のないところであろう。今後著者の見解が我が新分野を切り開くという先駆的意義をもち、その内容が斬新である総じて、本書は紛争にたいする科学的アプローチとして、学界に

(内山正熊・日向精義)

その第一章で述べている。

## William Zimmerman, "Soviet Perspectives on International Relations, 1956–1967"

Princeton University Press, 1969, pp. 336.

W・ジマーマン著

『最近のソビエトの国際関係論』

国際関係論は特殊アメリカ的な学問ではなかろうかと訝っているとする研究機関の戦後の合衆国における異常な増殖現象から、A・とする研究機関の戦後の合衆国における異常な増殖現象から、A・science politique, Vol. VI, No. 3 (July-September 1956)) のなかで、science politique, Vol. VI, No. 3 (July-September 1956)) のなかで、

紹

介と批

評

(二五頁) と、A・ジマーマンの『最近のソビエトの国際関係論』はこの国の学問研究の特徴の一つであつたことに気付いたであろう」したならば、国際関係の研究が明らかに回避されていた点こそが、が、「もし彼が一九五六年に も う一方の超強大国であるソ連に注目

争の概念は、 水平的、 国際的な次元に適用し得るように、「創造的 で機能する社会・経済的な体制に焦点をおいた伝統的なマルクス主 なかつた。スターリンが理論のコールフィーアスとして君臨してい 争といつた国内的な過程』に与えられていた」(四頁)。 世界史の発 『各国の経済と政治の領域に見られる、 生産諸力の発展と か階級闘 に発展」させられねばならなかつたわけである。しかしフルシチョ 義に一つの課題を提供した。垂直的、階級的な次元で構成された闘 場したのはさほど古いことではない。一九五六年の第二○回党大会 学者あるいはイデオロギストの手を離れ、独自の研究分野として登 宣伝者としてもつばら機能していたのであつて、 とに苦心しており、また国際問題の解説者は官製のイデオロギーの のロシアの対外政策』といつた無害な題材(三〇頁参照)を 選 ぶこ か、『一八七〇年代の国際関係とドイツ統一時代(一八六六―七〇年) 究も『一七九三―九四年のジャコバン党下の共和国の対外政策』と た時代には、外交問題あるいは国際政治を扱つたアカデミックな研 展過程において国際関係の果す役割は第二義的にしか評価されてい フ以前の段階で は、『社会発展のコース』を 決定する 優先権が、 ロシア革命の成立は、西欧的な民族国家という政治の文脈のな 国際関係が、

一四九 (一八七一)

以後のことであると、ジャーマンは見ている。

門家はいかなる実体を国際関係のアクターと認めているか」、 まざまであるが、 象領域については、 列的に紹介するといつた作業には満足していない。国際関係論の対 を疑問文の形式で表現すると、たとえば「ソビエトの国際関係の専 制の変化の速度と方向を左右するプロセス」であるという。これら 第二は「この体制に関与しているアクターの姿勢」、その第三は「体 項目は三種類であつて、 の語形変化表に記載されねばならない変化項目は幾つであるのか。 際関係論的な思考と所説の分析方法を明らかにしている。では、 表を提示することができる」(二一頁) として、まず、ソビエトの国 説を描写する際に基準として役立つ一組の問題点、いわば語形変化 るいはグループの所説、この場合はソビエトの国際問題解説者の所 る理論構成への諸提案を参考にすると、国際関係についての個人あ ているように … 」(一九頁)、 た高度で異なつた方向に飛ぶ飛行機のようなものである』と指摘し イトによつて代表された主張を両極とするさまざまな論議が存在し 「どのようなかたちで、 を特定の国際体制の特徴と見ているか」といつた問題であり、 また「スタンレー・ホフマンが『国際関係の理論は異なつ 「最近、 アメリカの国際関係の専門家が唱えてい 最近のソビエトの国際関係論的な文献をただ羅 特にアメリカをどのように評価しているか」、 一方ではJ・モーゲンソーに、他方ではQ・ラ またどの程度まで、 バランス・オブ・パ その第一は 方法論についても研究者によつてさ 「国際的な体制の構造」、その 「アク ヮ ح

> の維持 章以下で指摘された素材と展開された記述を要約してい 課題に対するソビエトの態度、 第二章では、国際関係論がソビエト社会科学の一分科として登場し のソビエトの国際関係論』の各章がこのような観点から配列されて 可欠な背景をかたちづくる」 共通したプロセスとパターンについてのソビエトの評価の分析に不 り、最後の第八章は、 の対外的な姿勢を第六章で、また第七章では、 いてのソビエト的な見解を分析する。 第五章は、二大強国間ないしは二つの体制間における力の分布につ のピラミッド的なパターンについてのソビエト的な思考を解明し、 るソビエトの専門家の所説を整理する。 てきた過程を明らかにし、第三章では、 いることは指摘するまでもない。序論的な第一章につづいて、 次大戦後の国際関係に現われているような、さまざまな国際体制に 方はマクロの、 ――と革命― そして他方はミクロの ―現国際体制の変革――という矛盾した二つの ソビエト対外政策の解明と予見のために第二 (二三頁)と理解されている。 特にその変化が取り上げられ ソビエト側から見たアメリカ 前二者の問題の分析が 第四章は、 国際関係のアクターに関す 生存——現国際体制 今日の国際秩序 『最近 第二

た国際社会を対象とした「西欧の国際関係論が、過度にエスノセントればならない。核時代の国際政治すなわち米ソの二大陣営に分裂しの本質的な問題の解明への情熱に支えられていることを指摘しなけの本質的な問題の解明への情熱に支えられていることを指摘しなけかを中心として発達した国際関係論への反省とソビエトの対外政策が、フェリジマーマンの『最近のソビエトの国際関係論』の構成は以上のよ

紹介と批評

家にとつても、ソビエトの研究者にとつても貴重な存在となろう。家にとつても、ソビエト対外政策との関連」についての解答(特に二九その基本的な問題点、特に「マルクス・レーニン主義イデオロギーとスターリン以後の対外政策との関連」についての解答(特に二九との基本的な問題点、特に「マルクス・レーニン主義イデオロギーとスターリン以後の対外政策との関連」についての解答(特に二九との基本的な問題点、特に「マルクス・レーニン主義イデオロギーとスターリン以後の対外政策との関連」についての解答(特に二九とするような配慮を与えていり、(八頁)という反省から、彼は、国際関係論の比較研究の発展に充分な配慮を与えていり、「八頁)という反省が表

(中沢精次郎)